おおさか KEYわーど 第16回

世界に知られた町人学者が大阪にいた 木村蒹葭堂のコレクション

『奇貝図譜』
（財）辰馬考古資料館所蔵

谷文晁筆　木村蒹葭堂像（部分）
大阪府教育委員会所蔵/国指定重要文化財

白い入道雲がむくむく湧き起こる。暑さがこたえるが、子どものころは海水浴に行ける夏がうれしかった。貝殻を拾って帰り、菓子箱でこしらえた標本箱に入れた。夏休みの宿題である。民宿で食べたサザエのふたやなんかも混ざっていたが…。

江戸時代の大坂で最も全国に知られたのは誰だろう。文化芸術、学術の世界ならば、おそらく木村蒹葭堂（1736-1802）ではなかったか。今回の表紙は、その蒹葭堂が蒐集した貝類標本である。本誌を西長堀の大阪市立中央図書館（大阪市西区）で手にされた方は、せっかくの機会なので、お帰りの際にでも図書館の東南角に建つ蒹葭堂邸宅跡の碑をごらん下さい。蒹葭堂は北堀江の造り酒屋の主人であったが、本業とは別に博物学で活躍した町人学者である。博物学は、動物や植物、岩石など自然にあるモノを研究する学問で、蒹葭堂は小型の鯨、イッカクの牙を考証して『一角纂考』を刊行する。また、絵も好きで、自ら描いて文人画家として知られた。芥川龍之介は随筆で「僕の愛する蒹葭堂主人」と呼び、春風駘蕩とした蒹葭堂の山水画を讃えている。

諸国物産の集積地、大坂を代表する人物にふさわしく蒹葭堂は、国内はもとより、中国朝鮮から欧州に及ぶ膨大な書籍や書画、金石、地図、標本、その他、多種多様な資料を蒐集した大コレクターでもある。居宅は、まるで図書館であり博物館であり美術館であった。「蒹葭堂日記」（大阪歴史博物館所蔵）には、閲覧を請いに、堀江の邸宅を訪れた諸国の著名人の名が克明に記録されている。蘭学者の大槻玄沢、司馬江漢、天文学者の間重富、画家の谷文晁、円山応挙、経世家の海保青陵、大名の松浦静山、探検家の最上徳内…等々、多彩な分野の著名人が登場してここには書きつくせない。

蒹葭堂の博物学者としてのライフワークは、実は貝の研究だった。刊行されなかったが、辰馬考古資料館には、出版を準備していた自筆の『奇貝図譜』（上図）が残るし、大阪市立自然史博物館は、蒹葭堂が旧蔵した「貝石標本」（大阪府指定有形文化財）を所蔵する。「貝石標本」は貝と岩石標本から成り、貝は、七段重ねの手提げ重箱に収められている。日本近海のみならず南方の貝や、大西洋に棲む「モミジソデ」という種も含まれ、確認される範囲でヨーロッパから日本にもたらされた最も古い貝の標本とのこと。

コレクションを終生つづけ、町人学者となった蒹葭堂の原点はどこにあったのだろう。自伝によると少年時代、体が弱く、心配した親が草花を育てることを許したという。そこから動植物への関心が生まれ、本草学、博物学の研究へと進むきっかけとなった。絵画は、もっと幼少の時に興味を抱き、新傾向の中国絵画、いまなら「現代美術」に興味を抱いて文人画を学ぶのである。家業の余暇、純粋な知的好奇心を満たすため資料を集め、研究に没頭する蒹葭堂の原点は、この少年時代の体験にある。それを最後まで貫いた彼の生涯は、死ぬまで世界に好奇心を抱きつづけた“永遠の少年”の物語かもしれない。

現代の日本は、不況や震災など、この時代を生きるには何かしら空気が重い。しかし、夏の青空に湧き起こる真っ白な入道雲を見上げていると、子どもたちは自由に好奇心の翼を広げ、現実に押しつぶされ気味の大人たちも、子ども時分に宿していた好奇心と精神の活力をとりもどせたら、と思うのである。少なくともかつての大阪には、一生涯を通して知的好奇心の衰えることのなかった、蒹葭堂という世界に誇るべき“知”の巨人がいたのだから。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館教授／大学院文学研究科（兼任）。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。